

氏 名(本 籍)	石 ^{いし} 崎 ^{ざき} 和 ^{かず} 宏 ^{ひろ} (栃 木 県)	
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)	
学 位 記 番 号	博 甲 第 1037 号	
学位授与年月日	平 成 4 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	芸 術 学 研 究 科	
学 位 論 文 題 目	フランク・ツェツクの美術教育論とその方法に関する研究	
主 査	筑波大学教授	宮 脇 理
副 査	筑波大学教授	伊 藤 鈞
副 査	筑波大学教授	藤 井 久 栄
副 査	筑波大学教授	山 口 満

論 文 の 要 旨

本論文は、フランツ・チゼック (Franz Cizek, 1865－1946) によって形成、実践された美術教育論を体系的に解明し、その理論と実践の整合性を検証することを目的としている。なお、本論文の構成は 8 章、本文 484 ページ、注釈および参考文献 41 ページ、資料等 27 ページ、計 552 ページ (1 ページ当たり 800 字で、400 字詰め原稿用紙約 1104 枚に相当する) からなっている。

19 世紀末から 20 世紀前半においてチゼックは、美術活動を媒介として子どもを有機的に発達させ、人格を統合させようとする、いわゆる「美術による教育」の理念を構想し実践した。そして、この理念は今日の美術教育学を形成する基礎的な理念の一つとされている。しかし、チゼックの教育論は、啓蒙過程における捨象や、チゼックの所論が記された第一次資料の未発掘という要因から、不明な点を多く残し、恣意的に解釈される傾向があり、これまで彼の理念と実践が実証的に考察されることはなかった。

以上のような状況をふまえ、まず序章において、本研究の意図と目的、チゼックの美術教育に関する先行研究を概説し、問題点を表明している。つまり本論文は、第一の課題として、新資料の発掘と分析によって新事実を提示し、チゼックの教育論とその方法に関する内容を体系的に解明することを指定している。また、第二の課題としては、これまでの先行研究では資料的な制約から困難であった、チゼックの美術教育論の構造の解明を新資料の分析から実証的に行うこと、そして第三の課題としては、チゼックの教育論の今日までの受容と歴史的な位置づけを明らかにし、今日的な意義と課題を考察することを表明している。

第一章では、チゼックの事績に関する事実関係の修正と新事実の提示を行い、全体像を明らかに

している。まず、チゼックが子どもの美術を発見し、美術教室設立に至った過程と、ウィーン美術工芸学校での装飾教育の軌跡を提示して、チゼックの教育が、青少年に対する教育と青年学生に対する専門教育の二つの系譜によって展開されていることを明確化している。また、チゼックの教育が、第一次世界大戦後、世界的な援助の下で行われた海外巡回展を契機として、同時期に拡大進展した新教育運動と呼応し、欧米諸国において美術教育分野における新教育の方法論として受容されたことを論じている。そして、1930年代以降、チゼックの教育が「教えない、学ばない、自ら発達させる」という理念に基づいた実践を幼児・児童期の子どもを中心にを行い、この理念がその後の世界の美術教育に多大な影響を与えたことを考察している。

第二章では、チゼックの理論形成の背景として、伝統的な図画教育への批判、芸術改革の意志、そして子ども中心の教育観を提起して論考している。19世紀後半から20世紀初頭の欧米諸国における図画教育が、実利的で技術習得に重点がおかれ、模写訓練を中心としたのに対し、チゼックはこのような実利的で訓練的な図画教育を批判し、子どもの本性に対応した教育と創造性を重視する教育を主張して、旧来の学校に代わる新たな教育施設を設立した。また、彼の美術教育論の背景には、反模倣や表現主義的態度から創造的な自己表現を追求する視点の所在と、子どもの美術や原始芸術におけるプリミティブで根源的なものの中に創造的な造形の在り方を求める視座の所在が、同時代の美術と呼応して認められる。さらに、子どもを小さな大人としてではなく、子どもに独自の価値を認め、子どもの本性に即す美術による教育を指向するチゼックの主張が、いわゆる20世紀初頭の新教育運動の考え方と同時性をもつものであったことを論じている。

第三章では、チゼックの教育論が子どもに対する実践的な経験から帰納的に集約されていることを指摘し、その経験的に認識した子ども観を核として、教育観、方法の原理、教授形態が形成され、チゼックの教育論が構造化されることを論じている。まず、子どもは子ども独自の行動法則をもつという認識や、子どもは生来の創造力をもち、その根源は本性にあること、そして子どもは自然な環境の中で有機的に成長するというチゼックの主張を分析し、さらに子どもの本性に関しては、創造的な活動が衝動、遺伝素質、環境の三要因の関与を受け、チゼックがそれを具体的に造形活動において実証しようと試みていたことを明らかにしている。また、自然な環境下でみられる子どもの造形の有機的発達段階、つまり児童美術、青少年美術、成熟した美術への過渡的段階に関するチゼックの主張の諸相を明らかにし、その背景を検討している。

上述したチゼックの子ども観をふまえ、さらに子どもの自然な発達が達成されるならば、子どもに備わった創造性は、あらゆる方面において有益なものになるとのチゼックの考えを明らかにし、創造力と自己教育力の育成を目的とした民衆教育の視点を明確化している。そして、芸術的な造形活動がその目的を達成するための教育媒介として位置づけられ、その教育方法が、子どもの抑圧を取り除き、自由な環境を保障する「自由の原理」、子どもの本性に即して子ども一人一人への対応を考慮する「合自然の原理」、子どもの自主的な芸術的自己表現活動を促し、その過程で自己教育を実現させる「自己活動の原理」という三つの方法的原理に基づくものであることを考察している。

第四章では、児童・青年前期の教育方法について、青少年美術教室での実践活動を分析し、実践

方法の特質を考察している。まず、青少年美術教室の形成過程と青少年美術教室における教育方法の変遷、ならびに生徒の絵画作品の変遷を分析し、前期と後期の活動の区分を提示している。そしてチゼックの指導は、造形の発達段階を考慮して、年齢的に4～7歳、8～10歳、11～14歳の三つに分けて行われ、そこでは子どもが想像による表現を行える間は、想像による創作表現を保護・促進することを基本とし、模写や写生、造形的訓練は避けられていた。しかし、いわゆる思春期に表現が停滞した場合、自然の対象を分析的に観察し、それを装飾などに統合させる「造形」(Gestaltung)の指導が行われていたことを指摘している。また、チゼックの授業は、基本的に生徒がテーマ、材料、技法を自由に選択し、個人に対応した主体的自己制作活動を行えるように配慮され、原則的に技術は一切教えられなかったが、道具の使い方は助手を通してかなり熟達するレベルまで指導されていた。しかし、この指導は生徒の表現を助長するための前提、つまり基礎指導として位置づけられており、子どもの想像領域自体を干渉するものでなかったことを論じている。

第五章では、青年期全般の美術教育の方法について、その授業形態と内容を明らかにし、さらに児童・青年前期と青年期の有機的関連に関するチゼックの構想を考察している。チゼックの提示した「自由画」が、青年前期以降の方法論であり、想像による表現から視覚的な表現に関心が移行する発達に対応させた新しい図画の教授方法であるとし、従来の「自在画」では模写が重視されたのに対して、「自由画」では創作が強調され、その基本的な創作原理としての分析的観察とその統合的変換に評価すべき点があることを論じている。一方、チゼックは自由画の分析と統合による表現とともに感覚と感情の表出を根源的基礎表現としていた。第一次世界大戦後、ウィーン美術工芸学校の装飾課程で、彼は子どもの表出的な表現プロセスと共通する創造表現の演習を学生に試み、これらの演習による作品には、表現主義、立体派、未来派の影響が認められ、チゼックがそれらを「キネティズム」と呼び、一つの美術運動体として展開させていたことを実証している。さらに第四章と第五章の教育方法を総括し、チゼックの教育構想が、芸術の革新は子どもの創作から始まるという信念に基づき、教条的な教育方法をさけ、芸術家としての主体的な創作姿勢を子どもに定着させる視座によって貫かれていることを考察している。

第六章では、チゼックの教育の受容をオーストリア、イギリス、アメリカ、日本の場合について、民間教育運動との関連を中心に分析している。オーストリアではチゼックの教育理念は、今日まで「開かれた絵画教室」において直接的に継承され、また近年、美術館における創作活動という視点で積極的に生かされつつある。また、イギリスやアメリカでは、国際美術教育会議や1920年代のチゼック教室の巡回展を通してチゼックの教育が受容され、その背景には1920年代の新教育運動、あるいは進歩主義運動との呼応が認められている。チゼックの影響は、美術教育の内容を自己表現活動重視に方向づけたが、それに対する批判も認められる。日本では、チゼックの教育が第二次世界大戦後の創造美育運動を通して受容され、さらに1960年代に批判を受けつつも、今日まで積極的な評価がされ、今日的な解釈の論議に展開していることを論じている。

結章では、チゼックの教育論の今日的な意義について考察している。チゼックは、子どもを生まれながらに創造的存在とみなし、また、子どもの本性に対応した教育方法を模索する過程で、知識

や技術の習得を目的として子どもに訓練的な学習を強制することを否定した。そして、子どもを自由な環境において抑圧をなくし、彼らの内部にある生来の素質を引き出すために新たな教育施設を創設した。このような彼の教育論は、同時代の新教育運動と呼応して受容され、美術教育分野における新教育運動と位置づけられている。そしてチゼックの教育論は、「美術の教育」から現代の「美術による教育」への理念の転換を促した史的意義と、旧来の学校教育に代わる、いわゆるオルターナティブな試みとして今日的視座を有するものであると結論している。

一方、オルターナティブの視座を有して展開したチゼックの教育論は、今日、社会教育の分野で再評価されつつあり、今後の発展に可能性を与えている。ただし、学校教育におけるクラブ活動や選択教科などの弾力的な方策の中にもそれを見いだすことが可能である。また、従来の学校教育や社会教育という枠内での模索にとらわれずに、学校教育での治動と美術館等の活動にみられる社会教育での活動との有機的関連を模索することや、現代美術と美術教育とのかかわりの模索などに、従来の視点に代わる新たな方策への視点が考えられ、それらが今後の美術教育の課題となることを提起している。

審 査 の 要 旨

子どもを小さな大人でなく、子どもの独自性を認め、その本性に即した発達過程の中で美術教育を確立したフランツ・チゼックの業績は、現代の美術教育の原点として重要な地位を占める。しかしながら、我が国においてはこれまで断片的な紹介にとどまり、本格的にその業績を検証する試みは皆無であった。

本論文は、新たに発掘した草稿や著作資料等の解説と分析に基づいて、チゼックの美術教育に関する理論と実践を客観的に明確化したもので、その研究上の意義は大きい。特に、これまで論考の行われなかったチゼックの思春期以降の青少年を対象とした美術教育活動に焦点をあてて、その形成過程と性格を解析した論述は高く評価されるものである。また、チゼックの前半生における青少年美術教育に関する理論と方法を研究の視野に取り込み、それを後半生の児童美術教育に関する理論と方法とに統合して、児童期から青年期に至るチゼックの教育の一貫性と構造を浮上させ、両者の有機的関連性についての新しい知見を示したことは、この種の研究が未だなされていなかっただけに、画期的なものと評価できる。

しかしながら、本論文には今後に残された課題も少なくない。まず、近代の美術運動が多様な造形原理を浮上させ、これと「児童の世紀」を唱えた一連の教育運動との接点は、児童画を中心とした美術教育運動の規範として周知されてきた。本論文は両者にかかわる事実関係を、時代のエポックメーカーであったチゼックの思想と実践に着目し、現代の美術教育論への再構築を試みているが、その近代美術と教育運動との関連についての検証はまだ弱く、部分的に概念の不明確さや短絡的な箇所がみられる。また、多様な価値が併存する現代において、人間を陶冶するという命題は、極めて困難な課題を内包し、特に芸術による教育は、芸術が多様な価値をもつがゆえにその傾向は強

い。本論文も基本的にこの課題に対峙するものであるが、チゼックの教育論が現代の美術教育においてどのように今日的意味をもち得るのかという課題は、今後のより詳細な研究の進展に期待するものである。

以上、本論文には、課題として残された問題もあるが、首尾一貫した全体の論旨と的確な考察は、今後の美術教育の理論と実践、現代美術の動向と美術教育の関係を考察する上でも貢献度は高く、この分野における本格的な研究と評してよく、堅実な研究成果として学界に一石を投じるものと認められる。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。